

# 仙台市宮城地区郷土史 探訪会通信

発行  
仙台市宮城地区  
郷土史探訪会  
会長 瀧原廣一  
編集 相沢良雄  
連絡先  
090-6626-9819



## 7月学習会 宮城地区の概略通史【第一弾】 「冥王代から中世の宮城地区」の歴史のポイントを学びました

宮城地区の概略通史  
～日本・宮城県・仙台市の歴史を視野に入れて～  
冥王代から中世までの宮城地区  
～日本列島出現・白沢カルデラ形成・縄文人達の遺跡  
・皇子氏の足跡・国分氏や藤原氏・平貞能氏の進出など～



宮城地区郷土史探訪会 相沢良雄

遙か46億年前に地球が誕生した時代から現代までを全3回で学ぶ、その【第一弾】の学習会が7月30日(日)に広瀬市民センターで行われました。

学習会は、42枚のパワーポイントスライドとA3判12枚の年表で進められました。

今回は地球誕生から室町時代までの宮城地区がテーマ。46億年前に地球が誕生し、約35億年前に生命体が生じた。その後、宮城地区の陸地がどのような経過を経て今日に至っているのかを確認しました。

2400～1500万年前に日本海ができたと言われ、1600～

1100万年前の宮城地区はまだ海底でした。そして、徐々に陸地が隆起し、日本列島の形成が進みましたが、800～600万年前に定義・作並・秋保・愛子・折立・紫山・根白石までを外円とする白沢カルデラが誕生。火山活動によってできた広大な凹地は、少なくとも6回の大噴火で形成されたようです。

3万年前位に石器を用い、狩猟生活を行う人達が仙台市内に出現しています。ただ、宮城地区内で確認できるのは、約1万年前の縄文時代に入ってからで、この時代の遺跡が現在までに76カ所発掘され、吉成地区以外のほぼすべての地区に人間が暮らしていたことがわかります。弥生時代の遺跡は、宮城地区で2カ所のみです。この少なさは単に未発見だけなのか土器が使用されなかっただけなのかわかりません。3世紀中頃から古墳時代が始ま

り、土師器や須恵器の使用、古墳の造営、漢字の使用、仏教や儒教の伝来などがこの時代の特徴ですが、宮城地区でもこれらの土器が出土しており、古墳時代を含む古代の遺跡が46カ所あります。ただ、土師器や須恵器は大倉や作並・新川からの出土がなく、芋沢が少なく、古墳は宮城地区全体から発見されていません。宮城地区から、須恵器を焼く窯跡が発見されている地域との行き来があつて、手に入れたと見られます。飛鳥時代・奈良時代に、本格的な国づくりの中で、地方の国・郡・里(郷)の設置が進み、宮城町誌に「宮城地区に丸子や科上などの郷ができていた」ように書かれています。この時分はまだ郷が形成される程の戸数がそろっていないと見た方が良いでしょう。平安時代の後期に入ると、これまで宮城町誌等で全く触れられて

いませんでしたが、愛子六郎(源頼景)氏が愛子の地に莊園を所有していたことがわかってきました。鎌倉時代に入ると、関東方面から新しい地頭職が宮城郡や名取郡に任命され、宮城地区にも平家の落人などと共に進出してきました。国分氏や郷六氏、平貞能氏、大倉氏などです。そして、平安時代後期に創建の諏訪神社に次いで宇那禰神社、小倉神社などが創建されます。



## 8月学習会のお知らせ

### 「宮城地区郷土史探訪会37年間の活動・定例学習会の振り返り」

本会は、昭和61年(1986)9月の活動再開後、ほぼ月1回の定例学習会を実施してきました。これまでの活動・定例学習会の歩み全78ページの取りまとめ資料を基にこの歩みを振り返ります。

★日時 8月22日(火)  
13時30分～15時  
★場所 仙台市広瀬市民センター  
セミナー室

## 特集 — 宮城地区内各地区歴史考 —

### 「郷六地区の歴史 ～その1～」

#### はじめに

郷六地区は宮城地区(旧宮城町)において、芋沢地区とともに最も東端に位置しています。つまり、郡山官衙や多賀城国府、城下町仙台に最も近い場所に立地している訳です。この立地条件が郷六地区の歴史に大きく関わっています。それを具体的に見ていきましょう。

なお、紙面の関係で概略の記事になることをご容赦願います。

この郷六地区、形式上は慶長6年(1601)の仙台藩誕生(仙台開府)の時点から、明治22年(1889)4月1日の町村制により広瀬村が誕生するまで、およそ288年間にわたって「郷六村」という一つの村であったことは、誰もが知っていることです。ただ、果たしていつから郷六という地名が生まれたのか、どういう由来があるのかということになると、案外あやふや

なところがあるかもしれません。

なお、形式上というのは、国分氏の家臣が郷六・愛子・大倉などに城館を構え始めたことや、水田の用水のあり方などをめぐる農民間の協力や年貢をまとめて納めるなどして自治意識が高まり、よりそれぞれの地域のまとまりが進んだことで、ほぼ村の原形が生まれ、それが「惣」あるいは「惣百姓」また「惣村」などと呼ばれるようになりましたが、仙台開府後に藩の支配の単位として「村」という呼称に統一されたと見られるからです。

#### 地名の由来

郷六の地名は郷六氏に因む地名で、愛子・熊ヶ根・作並の地名とともに、わが国において一つしかない、とても稀有な地名であるとともに親近感があり、プライドが持てる地名だと思っています。

まず、地名の由来を見えます。宮城町誌本編(改訂版)で郷六の地名について、『大日本地名辞書』には、「あるいは江六につくる、名義知れず」とあるが、「郷六城」に居城した郷六大膳なる武将に關係があると思われる。郷六大膳は国分氏の有力な一族で、初め宮城郡霞目村(七郷村内)の古城の城主であったが、後、宮城郡郷六村の郷六城に移り、その後代々この地に居城して

郷六の姓を名乗った。郷六の姓は郷六の地に居城したことによる在名(居住地の名によって付けた苗字―在苗)と思われる」とあるほか、『広瀬川の流れがかつて熊ヶ根や愛子落合などの峡谷に阻まれたが、その後長い歳月の間に障壁を打ち破って郷六の盆地に侵入した。かくしてこの地に一大湖沼地帯を現出したが、更に流れは仙台地区の放山付近の溪谷を浸蝕して奔流した。湖水が減退するにつれ、三角地帯を形成し、この間幾筋かの江流が流れて現在見る様な地形の土地が現出した」とあります。

しかし第一に「郷六氏が霞目村の古城から郷六城に移った」というのは逆で誤りです。それは「仙台領古城書上」を正しく読み取ればわかります。第二に、「郷六の姓は郷六の地に居城したことによる在名」は、その通りですが、「郷六氏が郷六の地名ができる前に郷六の地に入り、郷六という地名を名付けて郷六氏を名乗った」というのが真実に近いと考えています。郷六氏が郷六に住む前にすでに郷六の地名があったということであるとすると、それでは、果たして誰が「郷六」と名付けたのかという疑問が湧いてきます。

第三に、「この地に一大湖沼地帯を現出したが云々」の説ですが、何を根拠にしているのかがわかりません。おそらく想像に過ぎないと思います。

真実は、「郷六氏がこの地に入った時に、大きな広瀬川(江)の近くに6つの郷(小字)あるいは居住地が存在していた、若しくは字並び上体裁が良いので、『郷六(さとむつ)』だから郷六という地名にしよう」ということで、郷六の地名ができたのだと思います。

※大事などころですが、紙面の関係で以下は次号に続きます。

なお、この記事(私見)に対して疑問や評論等を寄せられることは大歓迎ですので、よろしく願います。(文編集者)

#### 入会のご案内



年会費3千円で原則月1回の学習会等の行事に参加可能。ただし、史跡見学等で交通費・見学料等の実費負担が必要になる場合あり。年度途中の入会も可能で居住制限はありません。

★詳細の問合せ先

事務長 相沢良雄

☎ 090-6626-9819